



Osaka Gakuin University Repository

Title	朝鮮通信使の研究に関する史学史的考察 Historiographical Research on the Korean Embassy to Japan during the Tokugawa Period
Author(s)	朴 都暎 (PARK DOYOUNG)
Citation	大阪学院大学 国際学論集 (INTERNATIONAL STUDIES), 第 24 巻第 1・2 号 : 1-13
Issue Date	2013.12.30
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

朝鮮通信使の研究に関する史学史的考察

朴 都 暎

Historiographical Research on the Korean Embassy to Japan during the Tokugawa Period

PARK DOYOUNG

ABSTRACT

This article explores the historiography of the Korean embassy to Japan during the Tokugawa period. It is said that the Korean embassy is the representative example of the friendly cultural exchange between Korea and Japan in the early modern period. However, the historiography of the Korean embassy shows that there were complicated sentiments and manipulated interpretations on the embassy's trips to Japan in both Korean and Japanese academia. Early Japanese researchers regarded the Korean embassy as the Korean monarch's tribute paid to the Tokugawa shogunate, while Korean scholars have accepted it as a symbol of cultural superiority over Japan, transmitting 'civilized' culture to the 'barbarous' Japanese people. That is to say, the notion of the cultural exchange through the Korean embassy was a one-way transmission rather than a two-way exchange in both the Korean and Japanese mindsets. I think that overcoming this nationalistic perspective is one of the most significant tasks in the historiography of the Korean embassy.

Since 1960s Japan, "the tribute theory" has been revised and current Japanese scholarship portrays the Korean embassy as the

diplomatic unit which contributed to the stabilization of East Asian power dynamics. Korean scholarship is a little behind its Japanese counterpart but shows a quantum leap in its escape from a domestic-oriented perspective after scholars launched research on the conversation log between Korean embassy members and Japanese intellectuals.

はじめに

朝鮮通信使は近世日朝関係史に於いて最も象徴的存在である¹⁾。室町時代から江戸時代末期まで朝鮮が日本に派遣した300～500人規模の公式使節団であった。通信使は文禄・慶長の役の直後、その派遣が一度中止されたが江戸時代に再開され1811年まで12回行われた。鎖国時代と言われている江戸時代にこのような大規模の外交使節団が継続的に来日したということ自体が珍しいことであり、この使節団が外交だけではなく当時の日本人たちと様々な文化的交流を行ったことから、通信使は朝鮮王朝と徳川幕府の交流史の研究に於いて欠かせないテーマとして位置づけられている。

では、日本と韓国は朝鮮通信使をどのような観点から研究してきたのか。本稿ではその流れを史学史的観点から考察してみた。通信使の研究が先行した日本では、通信使に関する認識が朝貢使節から善隣友好使節を経て政治的・外交的安定のための使節だったという観点に変遷している。通信使に対する研究が日本より遅い韓国では、日本に対する韓国の文化的優越感を再確認する観点から始め、筆談の分析による現実的な日韓認識の模索の方に発展している。本稿では以上のような通信使研究の傾向を分析し、今までの研究動向を整理すると同時に、これからの新たな研究方向についても考えてみたい。

朝鮮通信使と日本型華夷意識

通信使の研究に先に関心を示したのは日本である。朝鮮通信使が独立した研究テーマとして確立したのは1960年代に入ってからだと言われるが、それ以前から日朝関係を説明する素材として通信使がよく取り上げられた。初期段階の研究で日本の学界が定義した通信使の歴史的役割は朝貢使節である。朝貢というのは外交関係上格下の国が格上の国に定期的に貢物を上げながらその関係を維持することを意味する。つまり、外交関係で日

1) 「朝鮮通信使」という用語の歴史的適合性について様々な議論があるが、本稿では最も一般的に使われる「朝鮮通信使」又は「通信使」を使用することにする。

本より格下の朝鮮が格上の日本の朝貢するため通信使を派遣したという論旨が通信使の「朝貢使節論」である。しかし、通信使が日本に派遣された時代的背景や当時の日朝関係に照らし合わせてみれば、この「朝貢使節論」は説得力に欠ける。

通信使派遣の始まりは室町時代に日本が朝鮮に送った日本国王使の応答である。1404年、室町幕府の將軍足利義満が日本国王として中国から冊封され、同じく中国に冊封された朝鮮王朝と対等な外交関係を持つようになった。中国から冊封された国同士の間を「交隣」と呼び、この交隣外交の一環として日本が朝鮮に日本国王使を派遣し、朝鮮は日本に通信使を送ることになったのが通信使の歴史の始まりである。室町時代は倭寇問題、慶長の役の直後は朝鮮人捕虜の送還の論議が使節派遣の主な目的だった。江戸時代に入って將軍就任の祝賀という日本にとって都合のいい派遣目的が追加されるが、この事実をもって通信使が朝貢使節だったと見るには当時の朝鮮に対する日本の姿勢が低かったというのを指摘せざるを得ない。まず、通信使の再開を要請したのが日本であり、対馬藩が通信使の再開の実現のため国書まで改ざんしたのを黙認したのも徳川幕府であり、幕府が通信使の接待のため諸藩を動員し、100万石に至る資金をつかったことから考えれば、「朝貢使節論」は成立しない。

にもかかわらず、通信使が朝貢使節だったという認識が広まったのには二つの理由がある。一つ目の理由は日本の自国中心主義である「日本型華夷意識」である。小島敦夫によれば1970年代まで一般出版物から「朝鮮通信使」という用語はあまり見られなかったという。79年に刊行された『広辞苑』にもおらず、学研が編纂した『百科事典』にも「朝鮮通信使」という項目がなかったらしい。しかし、その存在自体が知られてないわけではなく、朝鮮から貢物を持って来た朝貢使節として知られていたという²⁾。つまり、朝鮮通信使の朝貢使節論は民間に伝承されていたことになる。これは日本社会が近世時代から根深く持っている朝鮮蔑視観又は所謂日本型華夷意識と、朝鮮を植民地にした日本帝国時代の歴史的経験とが連

2) 小島敦夫、『朝鮮通信使の海へ』、(東京：丸善株式会社、1997)、158-9頁

動した結果だと思われる。昔から日本では神功皇后が韓国の古代王国である新羅を討伐したという「神功征討説話」に基づいて朝鮮が日本に服属していたという史観が広まっていた³⁾。その上、17世紀に入って朝鮮国王の外交相手である徳川幕府の将軍を日本国王ではなく日本国大君と呼ぶ所謂大君外交の体制が確立してから日本が自ら東アジア世界秩序の中心だとする日本型華夷意識が芽生える⁴⁾。そして、これが近世の通信使に対する認識にも影響している。

もう一つの理由として取り上げられるのが幕府による情報操作である。当時の状況を見れば徳川幕府が通信使を朝貢使節として演出しようとした疑いは消し難い。即ち、通信使をプロパガンダにつかったということである。実際、当時幕府に仕官していた林羅山等が残した文章の中には朝鮮通信使の来朝を朝貢のように表現した部分がある。1611年の通信使の使行を羅山は『朝鮮信使来貢記』という題名で記録している⁵⁾。勿論、これか国際的に通用したわけではない。羅山は文書の草案に「朝鮮入貢 琉球称臣」などの文章を入れるが、それが文書の最終確認を担当していた以心崇伝により添削された⁶⁾。山本博文は「朝鮮入貢」という表現を使いたかったのは羅山の個人的な願望だけではなく当時の幕府の本音でもあるが、この願望が外交文書の実務を担当している崇伝により削除されたのは、通信使の来日を来貢とする見解は虚構的発想であり、国際的には認めてもらえなかったことを意味するという⁷⁾。李啓煌も日本が戦国時代に西洋という新しい世界との出会いを経験し、中国だけが世界の中心とする中華思想が崩壊し始めたという。前述した日本型華夷意識の始まりだが、このような意識は体系性を持たない国内宣伝用のスローガンに過ぎなかったという⁸⁾。

3) 仲尾宏、『朝鮮通信使の軌跡』、(東京：明石書店、1989)、258-59頁

4) Ronald Toby, 『State and Diplomacy in Early Modern Japan: Asia in the Development of the Tokugawa Bakufu』、(Stanford: Stanford University Press, 2000)、87頁

5) 金仙熙、「十七世紀初期～中期日朝知識人の他者像」、『広島大学大学院教育学研究科紀要』、Vol.2, No.50, 2001、282頁

6) 池内敏、『大君外交と「武威」』、(名古屋：名古屋大学出版会、2006)、2頁

7) 山本博文、『鎖国と海禁の時代』、(東京：校倉書房、1995)、180-81頁

8) 李啓煌、「江戸幕府의 対外関係 形成過程」、『韓国学研究』、Vol.20, 2009、240-42頁

徳川幕府が通信使を朝貢使節として演出しようとした例はこれだけではない。1636年、幕府は通信使一行の日光山行を提案したが、それが予定になかった要求だったため通信使一行はその提案を断った。しかし、幕府側は名勝地遊覧と休養という名目で通信使一行の日光山行を実現した⁹⁾。にもかかわらず、幕府は対内的には通信使が幕府の創設者である徳川家康を祀っている東照宮を参拝するために日光に行つたと宣伝している。

結局幕府が通信使を朝鮮に対する日本の歴史的優越性を強調する材料として利用し、その名残が初期の通信使に関する研究態度にも影響したと思われる。

善隣友好論の限界

日本の学界でこのような「朝貢使節論」が論破されたのは1960年代に入つて通信使が一つの独立した研究テーマとして確立された後である。多数の研究者たちが「朝貢使節論」が持つ理論的問題点を指摘し、通信使の派遣が日朝両国にどのような意味を持っていたのかを新たな観点から探ろうとしていた。その結果として取り上げられたのが「善隣友好使節論」である。慶長の役で途切れた通信史の派遣が再開されたのも戦争の事後問題の收拾のためであつたし、使節交換の相手が朝鮮との戦争を起こした豊臣家を滅ぼした徳川幕府であること。そして、後期の通信使の派遣目的が新しい将軍の就任の祝賀等の平和的で親善的だったことから通信使の役割を朝鮮と日本の善隣友好の増進と見た見解が確立したのだ。

その過程の中で、通信使が持った文化的機能が強調され、その例として通信使の宿舎に数多い日本人が集まり文化的交流を求めたことや地方各地に残っている朝鮮文化の影響などが取り上げられている。このような研究に大きく貢献したのが姜在彦、辛基秀、李進熙、李元植等の在日韓国・朝鮮人の研究者たちである。日本人の研究者たちからは、このような研究傾向は日本で差別を経験した在日韓国・朝鮮人の研究者たちが民族的自尊心

9) 韓泰文、「朝鮮後期 通信使 使行録」에 反映된 日光山行, 『韓民族語文学』, Vol.65, 2013, 314頁

を取り戻すため朝鮮の文化にたいして日本社会が尊敬を示したことを強調した結果だという指摘もあるが、通信使に文化使節としての機能があったのは事実である。

通信使は三使以外にも学者・文人・訳官・医者・画員などが含まれている一大文化使節とも言える使節団だった。その中には馬上才という曲馬術の専門家もあり、その公演が一般大衆に人気があったという¹⁰⁾。実際、朝鮮通信使の使行録を見れば彼らが文化的交流で忙しい一日を過ごしたことが分かる。通信使一行との交流を求める日本人が増えると朝鮮王朝は製述官という詩文の作成を専門にする官吏と一緒に派遣することにしたが、1719年に製述官とし使行した申維翰が残した記録を見ると、通信使の一行が宿舎に着くと地域の人々が魚の群のように集まって通信使が書いた詩文の文章を求め、製述官は用意した紙が全部なくなるまで文章を休まず書かざるをえなかったという¹¹⁾。通信使の影響は日本の知識人層だけではなく唐子踊りや歌舞伎などの庶民の文化にも及んだ¹²⁾。

それ故、通信使一行の中には自分たちの日本使行を文化国である朝鮮が野蛮の国である日本に文化的恩恵を施す旅だと思っている人々も少なくなかったと思われる¹³⁾。朝鮮が日本を文化知らずの国と見下すのは珍しくないことで、文化面では朝鮮が日本より発達しているという考え方は朝鮮では一般的なことであった¹⁴⁾。しかし、ここで考えなければならぬのは、このような文化交流が通信使の来日による副産物であり、通信使の使行の本来の目的ではないということである。朝鮮が通信使の一行に多数の文化人たちを参加させ、「文明国」としての威厳を見せようとしたのは確かだが、通信使の派遣の本来の目的はそれよりも複雑な政治的・外交的背景を

10) 仲尾宏、辛基秀、上田正昭、『朝鮮通信使とその時代』、(東京：明石書店、2001)、22頁

11) 申維翰、『海遊録』、韓国古典総合データベース、http://db.itkc.or.kr/index.jsp?bizName=MK&url=/itkcdb/text/bookListIframe.jsp?bizName=MK&seojiId=kc_mk_m022&gunchaId=&NodeId=&setid=

12) 李進熙、『韓国斗日本文化』、(ソウル：ユウ文社、1982)、193-95頁

13) 河宇鳳、『朝鮮後期実学者の日本観研究』、(ソウル：一志社、1989)、196頁

14) 吉田光男、『日韓中の交流』、(東京：山川出版社、2004)、149頁

もっていた。それ故、通信使の文化的側面を強調し過ぎるのは通信使の本来の役割に関する理解を妨げる危険性がある。

徳川幕府が朝鮮に交隣関係の回復を要請した時、朝鮮が要求したのは徳川家康からの国書を送ることや戦時に朝鮮王朝の王陵を毀損した犯人を突き止め処罰することだった。どちらも日本としては容易に解決できる問題ではなかったが、仲介役の対馬藩が国書偽造という前代未聞の方法でこれを実現した。大きな外交上の問題が発生しかねないこの状況を朝鮮と日本、両国は黙認して流した。そして、幕府が来日した通信使の接待にどれくらい力を入れたのかは言うまでもない。朝鮮も徳川家康に対する参拝に見える可能性がある日光山行を1643年来日した通信使の正式日程として入れるなど、日本側の便宜を図った痕跡が見える¹⁵⁾。

しかし、前述したように当時の朝鮮と日本が信頼を回復して誠心を尽くした関係だったとはいいい難い。孫承詒はこの時期が中国で漢民族の王朝である明が滅びた後、朝鮮中華主義と日本型華夷意識が衝突した時期、つまり朝鮮と日本が自民族中心主義を全面に出し衝突した時期だったという¹⁶⁾。そして、小島康敬は徳川幕府が通信使を朝貢使節のように演出し、朝鮮は通信使を敵情視察の目的で使ったと論じ、善隣友好という表面的スローガンの裏を見る必要があると主張した¹⁷⁾。岩方久彦は通信使の使行を「善隣」という用語でまとめる観点を再検討しなければならないと指摘する。岩方によれば『朝鮮王朝実録』の中で善隣という用語が19件ある反面、交隣という用語は485件があるという。朝鮮通信使と結びつけて検索してみると、「交隣」は26件あるのに対し、「善隣」はたった1件しかないのが分かる。岩方は現代的意味では「善隣」と「交隣」には違いがないように見えるが朝鮮時代には違ったと主張している。彼によれば「善隣」はスローガンに近く、「交隣」は実際の政策的な面が強いという¹⁸⁾。

15) 韓泰文、314-15頁

16) 孫承詒、『朝鮮時代韓日関係史研究』、(ソウル: 지성의 샘, 1994)、261頁

17) 小島康敬、「江戸時代における朝鮮像の推移－知識人の場合－」、小島康敬、M. William Steele編、『鏡の中の日本と韓国』、(東京: ぺりかん社、2000)、27頁

18) 岩方久彦、「韓国에서 본 朝鮮通信使」、『World Congress of Korean Studies』、2008、6頁

徳川幕府が朝鮮との国交回復を切実に願ったのは、朝鮮を文化大国として尊敬したからではない。朝鮮も日本に文化的恩恵を施すために通信使を派遣したわけではない。日本では徳川幕府が国際的に認められているという宣伝の道具として通信使が必要な存在であり、朝鮮でも増している清王朝からの圧力等の国際力学の変化に対応するためにも日本との安定的な関係維持が必要であった。通信使の使行の本来の目的や役割はこのように冷静なものであった。

文化伝道師論の台頭

韓国で通信使の研究が本格化したのは1990年代に入ってからである。初期の韓国の通信使の研究は通信使一行が残した使行録の分析を通じ、彼らが日本という国をどのような観点から見たのかを分析する「通信使の日本観」が主なテーマだった¹⁹⁾。しかし、日本観に関する研究と言っても、その内容は単純に通信使たちが日本を「夷狄」として見たかどうかの議論が多い。つまり、昔の朝鮮の日本に対する文化的優越感を継承したような研究が多かった。

その後も通信使に対する関心が続くが、それにはいくつかの要因が考えられる。まず、2005年、韓日共同歴史委員会による通信使に関する報告書が公開されたことや2007年、通信使派遣の再開から400周年を迎え韓国と日本の両国で通信使行列の再現等の様々なイベントが開催されたことである。その結果、研究者たちは勿論、一般大衆にも通信使という存在が広く注目を浴びるようになった。そして、もう一つ考えられるのが2003年、NHKのBS放送を通じて放映されたドラマ、「冬のソナタ」から触発された「韓流」という日本内の韓国文化のブームである。韓国は1948年の独立から1998年までの長い間、日本の大衆文化を全面的に禁止した歴史がある。禁止の理由として建前としては日本大衆文化の「暴力性」と「扇情性」や韓国社会の「反日感情」等が取り上げられるが、日本の大衆文化の波及

19) 張舜順、「通信使研究の現況と課題」、『日韓歴史共同研究報告書』、2005、440頁の表を参考

力から韓国大衆文化を守るためという産業的理由もあったことは否定し難い。実際、韓国の大衆文化界による日本の音楽やテレビ番組のフォーマットの無断盗用などの問題が相次ぐ反面、日本に進出した韓国人の芸能人たちが苦戦するなど、韓国が日本に文化的に負い目を感じざるを得ない時が多かったが、「韓流」はこのような状況を一挙に変えてしまった。

この「韓流」をきっかけに韓国の文化が嘗て大衆文化先進国だった日本の市場で通用するという新しい経験を味わうことになった。韓国の国際文化産業交流財団が作成した「韓流フォーエバー：韓流の現状と経済効果分析」という報告書によれば、2005年が韓国の文化商品の輸出が最高潮に達した時期だったという。韓国社会が文化的自信に満ちていたときに日本に様々な文化を伝播したといわれる朝鮮通信使が注目されるようになったのは偶然ではない。実際、韓国では通信使を韓流の原型として見ようとした動きが数多く見受けられる。2009年、昔朝鮮通信使の出発地であった釜山市が朝鮮通信使テーマパークを企画した時、その設置委員会が通信使を「韓流の原型」と呼んだことや、2012年12月に国立春川博物館が通信使関連遺物の特別展を開催した際、そのタイトルを「朝鮮時代の韓流、通信使」にしたことなどがその例である。そして、新聞やテレビ放送などのメディアが通信使を紹介する際、「元祖韓流」という例えを使うことも著しく増えた。

通信使の文化交流の側面を分かりやすく説明するために韓流という隠喩が使われるのは自然なことであるかもしれない。しかし、このような隠喩によって韓国の一般大衆が通信使を日本に「先進文化」を伝えた文化伝道師として認識することになったのも否定できない。言い方を変えれば、通信使を善隣友好の象徴として規定しながらも実は韓国では通信使を日本に対する文化的優越感を再確認する材料としてつかったことになる。そのような面では通信使を自国の優越性を強調する道具として使った日本の「朝貢使節論」と韓国の「文化伝道師論」は妙に似ているとも言えるだろう。

筆談の研究と新しい視角

一般大衆の通信使に対する関心とは別に2000年代後半に入って新しい研

究傾向が見え始めた。それは筆談の研究である。以前の韓国の通信使の研究は使行録の分析が主流であった。従って、使行録の記録に基づいて、日本社会がどれくらい朝鮮の文化を尊敬し、朝鮮からの新しい文物の摂取を求めたのかを強調する研究が一時期の韓国の通信使研究のメインテーマだったと言っても過言ではない。しかし、使行録というのは使節が国内の人々に見せるために自分の見解に基づいて書いたものなので、通信使が又は当時の朝鮮人が日本のことをどのように思ったのかは見えるが、その日本に対する認識が正しかったのか、又は日本人が通信使や朝鮮という国についてどのように考えたのかは語ってくれない。しかし、筆談は使行録からは見えない点を教えてくれる。

初めは筆談の研究も使行録の研究のように通信使の一行たちが日本をどのように見たのかが中心になっていた。そして当然のように通信使が日本をどのように批判したのか、そして使行録に描かれた日本人たちがどれほど朝鮮の文化を渴望したのかという記録が中心になっている。しかし、次第に研究が進み、現在は通信使たちが日本を必要以上に過小評価したことや、朝鮮や朝鮮通信使たちについて尊敬の念ではなくむしろ、批判的見解を堅持した日本人も少なくなかったという研究結果もでた。その代表的な研究が具智賢の「필담을 통한 한일문사 교류의 전개양상（筆談を通じた韓日文士交流の展開の様相）」である。この研究で具智賢は通信使と日本の儒学者たちの筆談を分析し、日本の思想界が迅速および柔軟に変化した反面、通信使たちの考え方は時代の変化についていけなかったことを指摘している²⁰⁾。

通信使が先進文物を日本に伝播した文化伝道師だったと信じてきた韓国人には多少衝撃的な研究結果であるかもしれない。しかし、このような研究は自国中心主義から離れた真の日韓関係の理解には欠かせない重要な研究と評価できる。

20) 具智賢、「筆談을 통한 韓日文士 交流의 展開様相」、『東方学誌』、Vol. 138、2007、273-76頁

おわりに

朝鮮通信使の研究の歴史は日本と韓国の自国中心主義又は自国優越主義の露呈とその克服の歴史である。通信使の研究が先行した日本では、通信使に対する認識は朝貢使節だったという見解から始まり、1960年代に入っ
ては日本と朝鮮の善隣友好使節に、近年では朝鮮と日本が当時の東アジア
の力学関係で互いの政治的・外交的安定を保障するための使節だったと
いう観点でまとまっている。

日本より通信使の研究の始まりが遅かった韓国では通信使の研究が1990
年代に入って本格化するが、主に通信使の文化的役割に注目している研究
が多い。それは朝貢使節論に対抗する理論であると同時に韓国社会に根深
く存在している日本に対する韓国の文化的優越感の再確認でもある。この
ような研究傾向は2000年代に入って、通信使に関する一般大衆の関心が高
くなると同時に一層強くなり、通信使の「文化伝道師論」にまで発展す
る。しかし、2010年代に入って通信使と日本人たちの実際の筆談をまとめ
た『鷄林唱和集』等の筆談の研究が進むと同時に当時の通信使たちの日本
観、そして日本人たちの朝鮮観等を客観的に分析する研究成果が出始め
た。2012年、延世大学校の研究団が『鷄林唱和集』を完訳し、このような
傾向はより拍車をかけている。

参考文献

- 李啓煌. 「江戸幕府の 対外関係 形成過程」、『韓国学研究』、Vol.20、2009。
李進熙. 『韓国と 日本文化』、ソウル：을유문화사、1982。
池内敏. 『大君外交と「武威」』、名古屋：名古屋大学出版会、2006。
岩方久彦. 「韓国에서 본 朝鮮通信使」、『World Congress of Korean Studies』、2008。
金仙熙. 「十七世紀初期～中期日朝知識人の他者像」、『広島大学大学院教育学研究科紀
要』、Vol.2、No.50、2001。
具智賢. 「筆談을 통한 韓日文士 交流의 展開様相」、『東方学誌』、Vol.138、2007。
小島敦夫. 『朝鮮通信使の海へ』、東京：丸善株式会社、1997。
小島康敬. 「江戸時代における朝鮮像の推移－知識人の場合－」、小島康敬、M. William
Steele 編、『鏡の中の日本と韓国』。東京：ペリかん社、2000。
申維翰. 『海遊録』、韓国古典総合データベース

- 孫承喆. 『朝鮮時代韓日関係史研究』。ソウル：지성의샘、1994。
- 張舜順. 「通信使研究の現況と課題」、『日韓歴史共同研究報告書』、2005。
- 仲尾宏. 『朝鮮通信使の軌跡』。東京：明石書店、1989。
- 仲尾宏、辛基秀、上田正昭. 『朝鮮通信使とその時代』。東京：明石書店、2001。
- Toby, Ronald. 『State and Diplomacy in Early Modern Japan: Asia in the Development of the Tokugawa Bakufu』. Stanford: Stanford University Press, 2000.
- 河字鳳. 『朝鮮後期実学者의 日本觀研究』。ソウル：一志社、1989。
- 韓泰文. 「朝鮮後期 通信使 使行録に예 反映된 日光山行」、『韓民族語文学』、Vol.65、2013。
- 山本博文. 『鎖国と海禁の時代』。東京：校倉書房、1995。
- 吉田光男. 『日韓中の交流』。東京：山川出版社、2004。